

1960年代以降、美術におけるモダニズムが行き詰まりを迎え、ランド・アートに代表されるように多くの芸術家が、還元主義的芸術観や近代的な展示空間への反省から、美術館やギャラリーの外へと活動の場を拡張していった。そうした状況下で制作された美術作品の中には、仮設的、一時的な性格を持ち、それ自体は失われ写真や残された資料でのみ存在を確認できるものも少なくない。ゴードン・マッタ＝クラーク (Gordon Matta-Clark, 1943–1978) も、そうした作品を制作した芸術家の一人である。マッタ＝クラークの活動は、パフォーマンス、映像作品、インスタレーション、果てはレストラン経営まで多岐にわたるが、建物を大規模に切断、加工する一連の作品群によって最も知られている。これらの建物を加工した作品は、作品の完成後すぐに取り壊されておりすでに現存していない。私達はこれらの作品について、残された写真や映像、テキストを通してしか思考し得ない。それにも関わらず従来の研究においては、マッタ＝クラークの写真や映像がどういった特性を持ち、そのサイトである建物の作品とどのような関係を持つものなのかということは、十分に検討されてきたとは言いがたい。マッタ＝クラーク研究の主導者の一人である美術史家のパメラ・リーは、マッタ＝クラークの写真作品を、単なる建物の作品のアナロジーとでもドキュメンタリーと見なすのではなく、「予期的 (proleptic)」という言葉を用いることで分析している (Pamela M. Lee, *Other Spaces: Proleptic Photography*, 2012)。しかしそこでも、個々の写真作品がどのような特徴を持つのかという問題は残されている。マッタ＝クラークの建物の作品は、場の固有性を持つものであり、個々の作品はそれぞれ異なる背景のもとで理解されねばならない。その写真作品についても、同様のことが言える。つまり個々の写真作品の分析は、固有の場との関係の中で行われる必要がある。本発表では、マッタ＝クラークの建物の作品の中でも特に場との関わりを持つとされる1975年制作の《円錐の交差》に関する写真作品を対象に、それがどのような特性を持ち、場の作品とどのような関係を持つのか分析を行っていく。《円錐の交差》は、マッタ＝クラークがパリ青年ビエンナーレに招かれ制作した作品で、パリのポーブル地区の再開発によって取り壊されることになっていた17世紀の建物をサイトとした。この作品は、完成後はすぐに建物が封鎖され、新聞紙上ではフランスの愛国主義的立場や再開発に批判的な立場から作品への批判がなされるなど、様々なコンフリクトの対象でもあった。分析を通じて、マッタ＝クラーク研究において従来不十分、あるいは抽象的なままであった写真作品の諸特性、失われた場との関係が明らかになることが期待される。また、分析の成果は、同時代やその後の芸術動向における、仮設的、場の固有性を持つ作品について考える上でも参照項となり得る射程を持つ。